

『01・眠れる森の魔女』からそのまま続き。

十一月上旬。時間帯は十六時ごろ。天気は雨。外の気温は十三度程度で、部屋は暖かい。雨の勢いはそれなりで、かなり冷える。

サリア、指一本動かす事もできず、ぼんやりと自分を見上げるばかりの主人公を、いとおしげに見つめる。

優しく頬に触れ、それから、主人公の身体を包んでいる掛布団をそつととる。そして、主人公の上に跨る。

主人公はそれを、全く抵抗できずに見上げている。

本当は一刻も早く『何か理由があるんですよね?』『信じていいんですよね?』と聞いて『そうだよ』と言われ、安心したい。

一瞬だって、彼女の事を疑いたくないのだ。

だが今の自分には、そうするすべがない。

ゆえに疑い続けるほかなく、不安なままにいる。

本当は、たとえば、サリアがどんな人でも。

彼女に何を言われても、されても。すべて信じて、身も心もゆだねたい。
自分の愛はそれほど深いのだと示して、彼女に安心してほしい。
だけど……今の自分にはそれができない。

ただ、彼女のする事を、不安なまま受け入れるしかないのだ。

SE1 .. 雨の音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0ー5秒ほどまで流してSE2。その後、音量を小さくする】

【アダルトパート01のSE1と同じ音】

SE2 .. サリアが布団をめくる音

【最初から最後まで流す】

●中央 上

「笑っているが、テンションは特に高くない」

あはは。乗っかられていよいよ危機感湧いちゃいました?」

主人公、目で『どうしてこんなことをするんですか? 何か理由があるんですよね?』と必死で問いかける。

サリア、これを理解していて、無視する。わざと気づいていないふりをする。

●中央 上

「いやいや。自分の立場、理解しましょうね?」

あなた、今全身こんな事になってんですからね?」

サリア、主人公の上に覆いかぶさると、首筋を舐める。

……あ。そういえば、人の肌を舐めたのなんか初めてだな。

勇者ちゃんの喉は想像以上に白くて、やわらかい。

体温は温かいどころか熱いくらいで、どくんどくんって、生きている音がして、ドキドキする。

誰よりも可愛くて、愛しいなっと思う。
あたしはきつと、この子のためなら何でもできる。
だから『何でもする』。

●中央 至近距離

「首筋を舐める」
れるっ……♡」

〈主人公〉

「！」

その時、主人公の身体に、びくびくと甘い快感が走る。

こんな事は初めてで、訳がわからない。

同時に、これまで考えていた事はすべて、どこか遠くへ吹き飛んでいく。

このままではいけないのに、ただ快感に目を閉じ、これを『もつと欲しい』と感じてしまっ
自分、必死に否定する事しかできない。

●中央 至近距離

「感じている主人公が可愛くてたまらない」

ふふ♥ 何かおかしいでしょう。

ちよっとペロってされただけなのに、すごく熱くて。
じわーっと甘い震えがきたでしょう」

サリア、主人公の左耳に唇を寄せる。

●左 軽く拭く

「左耳を『ふっ』と吹く」

ふっ♥」

主人公、たったこれだけの事で、軽く達してしまうほどの快感に襲われる。

たとえるなら、夜中に目が覚めて、今何時か確かめようと身体を動かしたただけで、イッ
てしまったような気分だ。

理解が追い付かない。それでも、サリアはさらに触れてくる。

●左 至近距離

「小さめの声で。主人公が予想以上に感じているのでドキドキしてくる」
ほら。訳わかんないですよね♥

●●左 【※マークのセリフ終わりまで、ゆっくりささやく】
この麻酔の何がヤバいって。

痛みにはとことん鈍感になるのに、快感には通常の何十倍も敏感になる所なんです。
つまり今のあなた。

【わざと悪っぽく、楽しげに笑う】

性的快感にはばっちり反応するんですよ♥
逆に言えばこの麻酔、全身を気持ちいい事に集中させて。痛みに耐えさせる薬なんですネ。

だから、キメセクなんてもんじゃないんですよ。

【特に可愛く】

だから♥」※

サリアの言葉が一度途切れて、主人公はこれから何をされるのか察する。
そして『それ』にどうしても抗えず、それどころか期待している自分に気づいてしまう。

●左 至近距離

「左耳にキスする」

ちゅ♡

●●左 【※マークまでささやく】

「甘くささやく」

全部忘れていっぱい気持ちよくなる？

「一呼吸おいてからささやく」

その方が楽に済みますから。 ※

●左 至近距離

「左耳にキスする」

ちゅ♡

●●左 【※マークまでささやく】

「ゆっくり、甘くささやく」

こうやってあたしにレベルドレインされながら♡ ※

「左耳にキスする」

ちゅ♡

●●左 【※マークのセリフ終わりまでささやく】

【甘くささやく】

いく事だけ考えよ？

【一呼吸おいてからささやく】

大丈夫。あなたは何にも悪くありません。

勝手にこんな薬打たれて、動けなくなつて。

抵抗したいのにやられちゃうだけなんですから」※

その言葉が、主人公の心を溶かす。

甘い提案に心を奪われ『そうだ。その通りだ。私は何も悪くない。このままでいるだけで、いっぱい気持ちよくしてもらえるんだし……』と思い始めてしまう。

それでもその決め手は『相手がサリアさんならいい』と思つた事だ。

言い訳になつてしまうけれど……決して、気持ちいい事だけに負けた訳じゃない。

私の気持ちは変わらない。サリアさんが妖精さんである以上、私は彼女の事が好きだ。彼女とのセックスだって、その顔すら知らないのに、これまで何度も何度も空想したのだ。

それとはまるで違う初めてになりそうだけど、それでも構わない。

夢に見ていた事に変わりはない。

それよりも、今の私がしなくてはならないのは、信じる事だ。

それは『彼女のする事ならば、きっと何か理由があるはずだ』と思う事だ。

たとえそれがあまり推奨されるものではなくても、彼女のする事ならば、きっと自分は受け入れられるはず。許したいと思えるはず。理解したいと思えるはず。と、信じるしかない。

それはとても怖い事だ。もし裏切られたら、私はきつととても傷つくだろう。

妖精さんと出会う直前のように、すべてを投げ出したくなるかもしれない。

なんて怖い賭けだろう。だけど、サリアさんを失うのはもつと怖い。

それでも、私には彼女よりも大切なものなどないのだ。だから今はこれを受け入れる。

それから……傷が癒え次第『彼女の本当の気持ちを知らる』という目的のもと、動く。

私はこれから、かつて彼女に教えてもらった通り『私は何もわかっていません』という態度をとって、彼女を油断させる。

それから焦らずに、少しずつ彼女と、この家を調べる。

そして、彼女が隙を見せたら……。

その時、理由を尋ねよう。

こうして、主人公は主人公なりに、サリアの心に近づこうと決めた。
だけど、サリアは主人公の気持ちには気づかない。

『ああ、やっぱりこの麻酔はすごい。頑固な主人公ちゃんの心を、こんなにあっさり溶かしてしまうんだ』としか思っていない。

●左 至近距離

「音を立ててちゅぱっと一回大きく舐める」
ちゅぱっ……。

●左 軽く拭く

「左耳を『ふっ』と吹く」

ふっ♡

●●左 【※マークのセリフ終わりまでささやく】

「一文（『。』）ごとに、一つ一つ、ゆっくりささやく」

その結果。全部吸われて。戦えない身体になっちゃいますけど。ちやあんと面倒見ますからご安心下さい？

【ひとときわ優しくささやく】

大丈夫ですよ。ひどくしません。

あなたはもうあたしの事なんて嫌いになったかもしれないけど。

あたしはあなたの事大好きですから。ちゃんと大事にします。

【少し間をあけてからささやく】
だから、ね？」※

サリア、正面に向き直る。

●中央 至近距離

「唇に一回だけ軽くキスする」

ちゅ♡

【わざと妖精さんっぽく、一人称が『お姉さん』になる】
お姉さんの事受け入れて？」

このままフェードアウトして終了。